

健康文化

## 同窓会

今井田 二三子

最近はクラス会と呼ぶのが普通になってきているようですが私達の集まりは同窓会と呼ぶのが相応しい気がします。

今年と同窓会は同級生の一人が経営するその名もまた昔懐かしい大観荘という料理旅館で開かれました。幼い頃の絵本で見たような玄関の構を目にしたとき、戦中派の人々であれば足を一步踏み入れたとたん想いは立ち所にその頃に返るのではないかという気がしました。

同級生の経営する旅館と言うことか、また旅館の名前にひかれてか東は東京から西は京都から学年の半数近い四十七名が一室に集いました。卒後始めての人も二三人ありましたが、同じような環境で同じような体験を重ねてきた私達は顔を合わせれば心の通う何かがあり話に事を欠くことはありません。粉雪の舞う中を食糧増産のため学校から4軒(km)ほどの処にある長良川河畔の開墾に向かった日のこと、芝草の深い根を取り除くため1米(m)近くも掘り下げた溝の底に十糎(cm)ほどの水晶かと思間違えるような巨大な霜柱を見つけて驚いた日のこと、私などは本当に水晶かと思胸をドキドキさせながらそっと溝の底を覗き込みに行ったものでした。帰りに黙って持ち帰って皆んなを驚かそうと見に行ったときにはそれは消え失せていてがっかりしました。

そうして雑草の取り除かれた新しい土に陸稲を上級生が植え付け、それが五月の雨で川の増水のため洗い流されたと聞いてがっかりしたことなど一人が語り始めれば次の人が受け話は尽きることはありませんでした。冷たい水を含んだ藁草履を堤下の農家で履き替え、その農家のおばあさんが短い冬の日差しを求めてその草履を乾かしておいて下さったということは後になって同級生の一人から聞きました。その同級生はおばあさんの心遣いが忘れ難く卒業後も時々農家を訪れ、ある時おばあさんの訃報を新聞で知り「お葬式に行って来たよ」とかなり時が経ってからポツリと告げてくれました。それを聞いて堤の下の農家も、其処のおばあさんもすっかり忘れ去っていた私は大変恥ずかしい思いをしたことが思い出されます。さらに戦局が激しさを増してきますと農作業は下級生に移り私達は軍需工場に変貌した教室や講堂で照明弾や飛行機からの

降下物につけるパラシュートの縫製に当たっていました。学年の中で体力のありそうな者は飛行機の覆いなどを縫うことになり二人一組でミシンに向かっていました。ミシンの送り金だけでは地厚で滑りの悪い生地は前に進まないため一人は前方で縫う速度に合わせて引っ張る役目をするのです。同じ釜の飯ならぬ同じミシンに向かい合った間柄は話題も呼吸も今もなおびったりなのです。マッチの軸のようなミシン針で自分の指を縫う人もたまたまあり、大事に至った人もないまま指を縫うことにもいつしか驚かなくなり、それが十数年を経て病院の当直やさらに開業後にミシン針で指を縫ったと言って青くなって飛び込んでこられる人を見ても動じることなく自信を持って対処できる一得を与えられることになりました。

同窓生の中には子育てが終わってからでしょうか再び高校の教科に挑戦し、その後アメリカへ留学をしてきたというファイトの持ち主もあり、また心筋梗塞で死線を越えたあと悟りとでも申しましょか、悩み苦しみはさらりと背後に流し去らせて今日に感謝し楽しく日々を過ごさなければと説く修行尼僧のような人もあり、その話に心から頷き聴き入る人等、中には楽しげに小唄にカラオケ、軽やかなダンスのステップなど、心豊かに今を楽しんでいる人の姿もあり、そこへ飛び入りあり、楽しげに眺める人あり、そこには温かい通じ合える心と同じ次元で物を見、考えることのできる何かがあることを感じました。それは一面没個性的といえるかもしれませんが、相手の考えを推し量って語らなければならぬ思いもなく、誰に今の自分を話しても理解し合えることに安らぎを感じたのは私一人ではなかったと思います。

普通の教科を受ける時間は大変少なく、卒後数学にてこずり、英語に泣き、動員くずれといわれて口惜しい思いをした人々も多々あったと思いますが、学業に勝る貴重なもの“通じ合える温かい心”を誰しもが女学生生活の中から得てきていることをしみじみ感じました。

「同窓会」また二、三年先に私達は会うことでしょう。

(内科開業医)